

# 通信

米澤より

小生常に郊外寫生に趣くおりは何時も「自然は吾等を要求する夫れ何んぞ甚しきや」と言ふ感念が起り申候而して自然に對し筆取る折りは自然あつて吾れなきが如き心持ちのせられ候されば背後に人の來れるを知らず執筆せるは幾何度此際に成りし畫は吾れながら上出來と感ぜられ候若しも執筆中野心欲心耻心の生じたる折りは其畫亦何んとなくいやみの生じおるを覺え申候

畫なりて見れば「何んぞ其色彩の少なきや」と嘲笑せらるゝが如く思はれて自然を見るの眼の幼なきを悟り申候、斯くなれば家路につくも自然の色彩の變化につき如何にすれば現はす事を得るならんと煩悶は念頭を去らず再往を促す次第にて候、一度畫等をとりに繪具をパレット上に出したる折りには自然の色を見て繪具を見ず只自然に従はんとつとめおり候されど自然を信ずる淺き爲か色彩に豊富なるを得ず實に吾れながら信仰の淺きを遺憾に思ひ居り候

自然美觀！之れ小生の胸中を去る能はざる所の一種の塊心なれども眼低く手腕上らざるを如何せんさればなり終生身を之れが發揚にゆだれ心眼手腕を益々向上的に進めんと決心致し候之れ小生が寫生を實行してつくゝと繰り返し／＼思ひ出さるゝものにて候今年の春は花の都へと雪より出で、一筋に此の道を學ばんと存じ候へば先生幸ひに指導の勞を取られん事を偏へに願上候而して小生は水彩畫研究所に入らん存念にて候

川島 穎 正

熊本より

寒氣漸日に相加はり候處

先生には愈々御清榮奉大賀候

扱て新たに一石一草より研究を始めし次第は前便申上置きし處其後着々倦まず困難に逢ふごとに(寫生上の)講習會の折のかれこれ思ひ合せなどして進歩は實に蝸牛のそれにも如かず候へ共課程のみは漸次上進せしめ十一月に入りては景色畫の稽古も初め申候何れも甚だ滯晦汚濁を極め居處我ながら愛憎盡きる次第に御座候へ共先生の曾て「寫生畫は眞ッ黒くなつても構はぬ」と仰さられし御言葉を楯と致し候忠實に自然に従ひつゝあらば他日奇麗に仕上ぐるを可得と存じ候

尙近ごろの日の短かきには弱り申候小生は目下醫院の調劑事務を執り居り候處田舎の事とて平均午後一時迄はかゝり申候間自其食事を濟まして寫生道具を擔ぎ出づるにて候へば日毎に日没の早きを恨み申候時々事務の緩なるときは朝食前にも走り出て候へ共いかばかりも出來不申候されど墨繪の修養の甚だ緊要なるを感じ來り候に付夜間は鉛筆擦筆に親しみ、用器畫も日出前と夜間にのみ限り居申候 尙夜間人物寫生(木炭にて)を試みんかと存候處如何の方法によるべきやみづゑ紙上にて御洩らし被下らば幸甚

益 承 次 一 郎

編者曰く 木炭畫は木炭用紙をカルトン(厚きボール紙にてよろし)に挿みて鉛筆畫の如く輪廓をとり極大體の明暗を分ち漸次細部に進みゆくのである通常石膏の顔一つ描くに三四時間宛六日間位ひはかゝります。